井ルソン山天文臺の詩

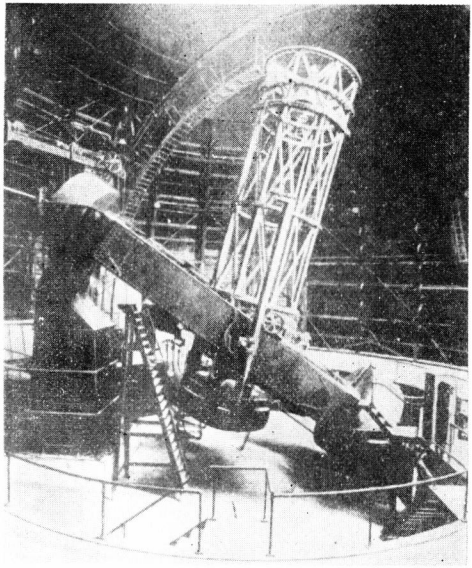
（つゞき）

翌くる日，兩側に棕櫚のさゝやく路を，
　　山麓まで行く行く．
山腹の黄褐土の日當りに，ずらり，
　　桃やオレンジを植えて．
その單調を緩和する，
　　荒野の小山などを夢みながら，
上へ上へ，細い白い道に沿ふて，
　　ぐるぐるまはりに登りつゝ，
暗綠の山セリジの間をジグザグして，
　　車は徐行する．眼下には明るい平野が，
飛行家の地圖の如く擴げられる．
　　家々や花園は．茂つた綠りの平方や立方の中に，
小さな白点となつて了ふ．
　　さて，或る急なカーヴを一廻りして，
頭が，深い溪谷の上を宙返りしたかと思ふとき，
　　はるか，三十哩の清い空氣を通して，

米國カリフオニア州南部の井ルソン山連峰

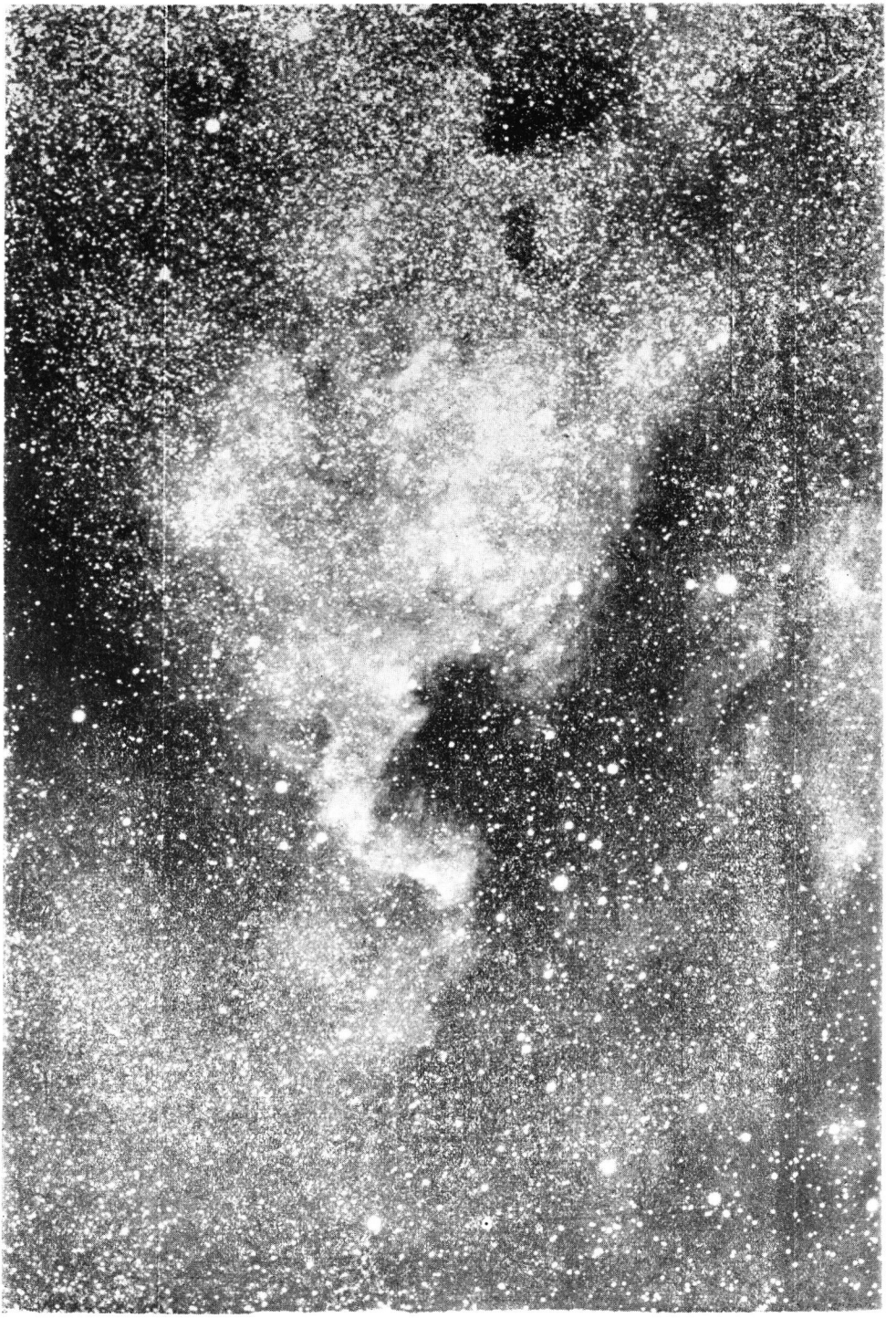
枝から一ヤードも吹き飛ばされた花蕚のやうに，
　可愛らしい，小さな帆が，
退屈さうに温かい青海の上を辷るのが見える．
　曲りくねつた此の九哩の道を，徐々と吾々は，
雲の上の輝かく峯に進み行く．
　行手に見ゆる卵殼の白いドームは．
もはや鷦鷯のでなく，多分，鷲の卵らしく，
　夕日に赤く染まつてゐる．
兩側に，セージの叢林や，南國の植物は消え，
　北國の樅や，たくましい，嵐の根の松が，
不思議な香をさせる．遂には，
　低い山々の例とは逆に，
あたりは大木が吾等を圍んで來た．
　山地の頂上に到らぬ前に日は暮れた．
見上げると，まるで大きな御寺のドームのやうな
　天文臺が，ボンヤリ，空に聳えてゐる．
そして，この奥深い闇の山は，
　脚下の世界の總ての記憶を忘れて了つたやうだ．
雲無き天にチラつく星々の群れ．
　あの，果ての無い宇宙に輝やく光り，
ちやうど其れは乳色の粉を蒔いたやうだが，
　皆此の粉一粒一粒が，燒ゆる太陽で．
其れ等一つ一つが愛らしい遊星たちを從へてゐる．
　奥深い闇の彼方で此等の星々の光は，
地の光，海の光，見えない街々の光りと一つになつて，
　ゆらめきつゝ，遂には星か否かの區別も出來ない，
山麓をめぐる暗い闇の世界で．

それから，うす暗いドームの中へ，息を殺して
入つた．見上げると，闇の中には
　かの光學の壯嚴な武器が，
巨砲の筒の如く，
　大空のアーチ形の窓へ向けられて，見えてゐる，
暗い脚もとでは，腕まくりした臺員が，
　今夜の準備に，晝一ぱい働いた汗をふきふき
臺長の命令一下を待つてゐた．スキチ板が
　白や赤の魔の火を光らせ，
チヨイと指先きのボタンを押せば，巨筒は
　生命(いのち)と意志(こころ)ある生物(いきもの)の如く，
あちこちの天空を覗き込む．下方には
　時計仕掛けが，靜かに，動氣をうちながら
地球自轉の步調をたどつて



「百　吋」　巨　　砲

一歩一歩と巨砲を動かし，
筒口を，或る特撰の星に定めて，
　視野から逃れ去るを追ふ．
　　さて，又，
時の車の釣り合ひをゆるめて，
　新しい天の一方へ向ける間，休ませ，
ドーム全体を，月の世界のやうに滑らかに，
　觀測者さへ知らないほど靜かに動かす．たゞ
星の窓からは，くら闇を通して，松樹の行列が
　インド兵の如く，音もなく過ぎ行く，
それから，一聲の合圖に，巨砲は
　筒口を，或る一つの光点に向け，止めた．
さゝやかな一つの星．臺長は梯子を昇りつめ，



THE "NORTH AMERICA" NEBULA

吾等が息を殺す間
接眼部を覗き込む．すると，高らかな笑ひに
皆の者を喜ばせつゝ
『木星にこぶが見える!!』——
吾々も笑つて，
『何ですつて？』『動いてゐるよ』と臺長の聲．
吾々は再び笑ひ，臺長のボンヤリ顔を見つめる
動く塔の上に，高く仰いで，
『それ，昇つて來て，見給へ！』
一人一人吾等は登る．
そして．皆，床へ降りて來た時に，笑つてゐるが，
心は今見たもので一ぱいだ．
次ぎに，吾が順番となり
あの，さゝやかな光点を見るや否や，
思ひがけ無く．其れは新しい事實，美しく
こゝに生れたか，空に浮ぶ世界の姿，みごとに丸い寶玉，
青空に止まる．——其の時，フト見る間に
一つの奇跡か！——ちやうど，まつすぐ上方に
微かな白の小山が一つ，靜かに盛り上り，
まるで眞球の小粒の姿で，すつかり親から離れ，
遂に，天空に浮んだまゝ
三つの姉妹星たちに御挨拶してゐるやう．
木星の
月一つ．かつて吾人が地球から見上げた月の如く，
おゝ，あらゆる夢を超えた美と清澄こそ
かのガリレオの「昔しの眼がね」が見つけた
星の音の聲であつた．
大宇宙の機構を雲霧に分けて，
『ジユピターは天にあり，尙ほ末永く，
人々のあらゆる叫びを超えて』とガリレオは
自ら夢の破船に壓伏される日まで，
眞理のために凱歌を擧げつゝ．